View metadata, citation and similar papers at [redacted]
brought to you by CORE

フランス語における属詞位置に現れる不定名詞句 UN N について

長　沼　圭　一

1．はじめに

「彼は医者である。」という内容をフランス語で言い表す場合、文脈によって表現が異なる。もし、

(1)　Qu’est-ce qu’il fait dans la vie ?

という質問に対する返答であるとすれば、

(2)　Il est médecin.

と表現されるであろう。しかし、

(3)　Qui est-ce ?

という質問に対する返答であるならば、

(4)　C’est un médecin.

と表現されるのが通常である。

ここで注目すべきことは、主語が人称代名詞 il であるならば属詞位置では無冠詞の médecin が用いられ、主語が指示代名詞 ce であるならば属詞位置では不定冠詞付きの un médecin が用いられるということである。以下のような発話は極めて容認度が低いとされている。

(5)　??Il est un médecin.

しかしながら、人称代名詞 il, elle を主語に持ち、不定名詞句を属詞にとっている文も観察されないわけではない。

(6) Parmi, les musiciens qui participent, il y a Dejan Bogdanovich, au violon. *Il est un soliste de notoriété internationale*, lauréat de plusieurs concours et professeur de violon au conservatoire de Venise. (*Midi Libre*, 24/8/2011, Factiva)

(7) Quant à Norbert, *il a été un ancien ouvrier de la pierre aux carrières d'Artiges avant d'intégrer, pendant seize ans, la Sim* (société industrielle de meubles qui appartenait au groupe Ranger). (*La Nouvelle République du Centre Ouest*, 23/8/2011, Factiva)

(8) Pourquoi Projecteur braque-t-il son spot sur Kadhafi ? Parce qu'*il est un écrivain* (Eh oui !), il a publié en 1998 un recueil de nouvelles au titre très prémonitoire, Escapade en enfer. (*All Africa*, 25/8/2011, Factiva)

本稿では、このように主語に人称代名詞 il, elle を持ちながら、属詞に不定名詞句を持つ例を対象とし、このような環境に現れる不定名詞句について考察を行う。

2．先行研究

2.1. 属詞における不定冠詞の有無

初等文法でも習うとおり、フランス語においては、一般に属詞位置に現れる名詞が職業、身分、国籍を表している場合は無冠詞になるとされている[1)]。しかしながら、多くの文法書で指摘されているように、属詞位置に職業、身分、国籍等を表す名詞が用いられていても、条件が整えば冠詞は現れうる。Riegel, Pellat & Rioul (1994) は以下のように述べている。

> 「主語または目的補語の属詞（On l'a élu *député* — On l'a nommé *général*. — Elle a pris un vieillard pour *amant*）が職業、社会的身分，国籍を表す場合、この属性付与がクラス分けの操作しか行っていなければ限定詞を付けないのが慣例である。補足的な特徴付けまたは限定がこれに加わると、限定詞が再び現れる：Jean est médecin / un

bon médecin / le médecin de Pierre — Je suis soldat（単なる身分の限定）/ Je suis un soldat（「その名にふさわしい」）— Gérard est français jusqu'au bout des ongles / est un excellent Français.」[2)]

ここでとりわけ不定冠詞の付与のみに注目するならば、bon, excellent のような形容詞による「補足的な特徴付け」が行われると不定冠詞が要求されるということである[3)]。また、Je suis un soldat の例に見られるように、修飾語句による明示的な特徴付けがなくとも、解釈上いわば「真の」という含意がある場合にも不定冠詞が付与されるということである。

PICABIA (2000) は、Ø N が外的性質を表し、un N が内的性質を表すとして、次のような例を挙げている。

(9) a. Paul est un sauveur.
b. *Paul est sauveur. (PICABIA, 2000, p. 82)

(10) a. *Paul est un sauveteur.
b. Paul est sauveteur. (*ibid.*, p. 83)

すなわち、sauveur（救い主）は個体を定義付ける内的性質を表すため不定冠詞を伴うが、sauveteur（救助隊員）は個体に与えられた外的性質を表すため無冠詞となっているということである。PICABIA (2000) は、次の例においても、Ø N と un N の解釈の違いが表れているとしている。

(11) a. Paul est Français.
b. Paul est un Français. (*ibid.*)

(11a) と (11b) の違いについて、PICABIA (2000) は以下のように説明している。

「もし話し手が、ポールがフランス国籍を持っていることを主張したければ、その場合には (50a) [= (11a)] の方が期待される文となる。しかし、ポールは、アメリカに移住し、そこでバスク風のベレー帽、バゲット、チーズ、フランスワインなど、フランス人の典型的特徴として想像されるものを示しているかもしれず、その場合には (50b) [= (11b)] の方が当然期待される文となる。」[4)]

CURAT (1999) は、限定詞なしでは属詞として容認されにくい例として次のような例を挙げている。

(12)　*Si vous êtes *fée*, je voudrais […] (CURAT, 1999, p. 228)

さらに、fée の類語について無冠詞で属詞になれるものとなれないものを分類した表として次のような表を挙げている。

[Si vous êtes N] est possible	*[Si vous êtes N] est impossible
alchimiste, astrologue, conjureur, devin, diseuse de bonne aventure, envoûteur, exorciste, illusionniste, magicien, nécromancien, prestidigitateur, shaman, sorcier, spirite	ange, archange, chérubin, démon, diable, énergumène, esprit, génie, monstre, séraphin, sirène

(CURAT, 1999, p. 229)

この表に関する CURAT (1999) の説明は以下のとおりである。

> 「この分類は明確な語彙的基準に従っている。Démon［悪魔］、monstre［怪物］、ange［天使］、génie［天才］はある人物の性質を命名しており、大部分が元来は種（espèces）を表している。逆に、devin［易者］、envoûteur［呪師］、magicien［魔術師］、prestidigitateur［手品師］は職業（fonctions）を表しており、-cien, -eur, -ogue, -iste などの接尾辞はこれらの名詞が活動（activités）と結びついていることを強調している。大まかに観察してみると、職業を表す名詞（noms de métiers et professions）は、活動を表しており、確かに限定詞を要求しない（*il est plombier*）が、動物の種を表す名詞は限定詞を省くことができない（*c'est un chat*）。もし限定詞がなければ、聞き手は意味が転換していると受けとめることになる（*il est* {*rat*［ネズミ＞けちな］、*chien*［イヌ＞けちな、厳しい］、*vache*［雌ウシ＞意地が悪い、冷たい］、*chameau*［ラクダ＞気難しい、意地が悪い］}）。」[5)]

CURAT (1999) は、表の左側の名詞、すなわち無冠詞で属詞となりうる名詞を職業を表す名詞に同化させている。確かに、これらの名詞は、肩書きと

して用いられうるし、職業名と同様、主語に合わせて性変化を伴う。一方、表の右側の名詞、すなわち無冠詞で属詞となりえない名詞は、肩書きとはなりえないし、また、名詞自体が固有の性を持っている。

小田（1999）は、次の例について、以下のような指摘をしている。

(13) a. Paul est agent de police, et son frère l'est aussi.
b. Paul est un agent de police, et son frère en est un aussi. (小田, 1999, p. 54)

(14) a. *Cocco est un chat, et Félix l'est aussi.
b. *Cocco est chat, et Félix l'est aussi.
c. Cocco est un chat, et Félix en est un aussi. (*ibid.*)

「一般に職業や国籍を表す名詞が多く形容詞化を許すのに対し、動植物および無生物を表す名詞でふつう形容詞化が難しいのは、前者ではそれが「人間」という範疇に属するという前提があって、形容詞化された名詞によって性質や属性が付与できるのに、後者にはそのような前提が無く、記述的に属性として付け加えることができないからである。」(*ibid.*)

小田（1999）は、このような「既に範疇化された「人間」と範疇化されていない「物」との対立の概念は、同定文・記述文のしくみと CE と IL の使用にも関わっている」(*ibid.*, p. 55) と述べている。

2.2. IL EST UN N 型コピュラ文

IL EST Ø N と C'EST UN N という二つのタイプのコピュラ文に関する研究は数多く存在し[6]、一般に、前者は記述文、後者は同定文であり、IL が名詞句に照応しているのに対し、CE は発話状況や命題内容など名詞句で表されないものを漠然と表していることが指摘されている。

本稿では、IL と CE の違いや記述文と同定文の区別といった問題には立ち入らず、IL EST UN N 型のコピュラ文にのみ焦点を当てる。その際に興味深い研究として Jeunot (1983)、および Jeunot (1983) を概説しつつ独自の分析を示している藤田（1985）を挙げることができる。

Jeunot (1983) は、

(15)　?Je suis un médecin. (JEUNOT, 1983, p. 85)

(15) は単独では不自然であるが、以下のような文脈を加えると適切になることを指摘している。

(16)　a.　Alors ainsi vous refusez catégoriquement de l'opérer ? — Mais je suis un médecin, Monsieur ! (je ne puis me permettre d'opérer)
　　b.　Alors ainsi vous refusez catégoriquement de l'opérer ? — Mais je suis un médecin, Monsieur, pas un chirurgien ! (*ibid.*)

JEUNOT (1983) によると、(16a) と (16b) に共通することとして、対照の効果を持つ文脈に置かれているということが挙げられるとのことである。すなわち、médecin という概念を p と置くと、(16a) においては pas médecin、(16b) においては chirurgien という言語的補足（complémentaire linguistique）p′ が構築されるのである。したがって、(16a), (16b) においては、単に p を記述しているのではなく、(p, p′) の中の p に言及しているのである。

また、JEUNOT (1983) は、次の例に見られるように、形容詞や関係節によって示唆的特性（propriété différentielle）が付与されると、不定冠詞が現れることを指摘している。

(17)　a.　Je suis un bon médecin. (Je le pense sincèrement.)
　　b.　Je suis un excellent médecin. (C'est vrai.)
　　c.　Je suis un mauvais médecin. (Et je ne le nie pas.)
　　d.　Je suis un grand médecin. (D'ailleurs tout le monde le dit.)
　　e.　Je suis un médecin qui ne brutalise pas ses patients.
　　f.　Je suis un médecin qui aime l'homme. (*ibid.*, p. 86)

JEUNOT (1983) によれば、être médecin という記述がいかなる量化も受けておらず、したがって対応するトークン（occurrence）を持たないのに対し、(16), (17) では、対照の効果や示唆的特性の記述を通じて、médecin のあるトークンを、同じクラスの他のトークンから、個別の特性により区別しているとのことである。

(17) について、藤田（1985）は次のような興味深い指摘をしている。

「また、(8a) [= (17a)] と (8c) [= (17e)] を例にとれば、それぞれの文は主語 je が［bon médecin］の一人、あるいは［médecin qui ne brutalise pas ses patients］の一人であることを意味してはいない。médecin という notion は修飾されて下位分類を受け、主語は bon あるいは qui 以下の特性によって指定されるタイプの médecin であることを示すと考えられる。ここでの不定名詞句はいわば intensionnel なレベルでクラス構築を行っているわけである。

これは、抽象名詞、物質名詞、唯一物名詞に形容詞がつくと不定冠詞 un が現れる現象とよく似ている。une passion absurde, un vin exquis, un soleil ardent などがそれである。une passion absurde では［passion absurde］の一つが問題になっているのではない。passion という notion が修飾を受けて下位分割を起こし、absurde という特性によって指定される passion の一タイプ（種類）が指示されているため、un が出現するのである（cf. ドルヌ他, p. 55, 注 8)[7]。」（藤田, 1985, pp. 82–83）

しかしながら、Jeunot (1983) は、主語が IL の場合は対象の効果、あるいは示唆的特性を付与しただけでは適切とはならないことを指摘している。

(18) a. Jean refuserait-il de lui couper la jambe ? — ?Oui, il refuse ; il est un médecin, pas un boucher.
b. Faites quelque chose pour lui, s'il vous plaît, il souffre ; *mais il est un médecin, pas un faiseur de miracle ! (Jeunot, 1983, p. 87)

(19) a. *Il est un bon médecin.
b. *Il est un remarquable médecin.
c. *Il est un mauvais médecin.
d. *Il est un médecin qui ne prend jamais de repos. (*ibid.*)

Jeunot (1983) は、疑問、仮定、譲歩などのモダリティーに置かれた場合に、IL と UN が共起しうることを示している。

(20) a. Il est médecin, c'est entendu ; mais est-il un médecin, un vrai comme on dit ?

b. Est-il un grand médecin ?
c. Est-il un mauvais médecin ? (*ibid.*, p. 89)

(21) a. S'il est un médecin, qu'il le prouve !
b. S'il est un médecin, il fera cette intervention urgente.
c. S'il est un grand médecin, c'est lui qui soignera sa Majesté. (*ibid.*)

(22) a. Tu as beau dire tout ce que tu veux, il est quand même un bon médecin.
b. Il est quand même un sacré médecin, malgré tout ce que vous pouvez raconter sur son compte !
c. Il est un grand médecin après tout, il peut bien soigner le président. (*ibid.*, p. 90)

Jeunot (1983) によると、例えば、

(23) Je sais que Jean a commencé des études de médecine ; mais maintenant, est-il médecin ? (*ibid.*, p. 88)

(23) の例においては、(être médecin, ne pas être médecin) で示される (p, p′) という記述の異なる価値 (valeur) への走査 (parcours) が行われており、この場合には不定冠詞は導入できない。一方、(20a) から (20c) の疑問文においては、質的な価値への走査が行われている。すなわち、(20a) においては (vrai, pas vrai)、(20b) においては (grand, pas grand)、(20c) においては (mauvais, pas mauvais) に対して走査が行われているのである。このような質的な走査が起こる場合に、IL と UN の共起が可能になると、Jeunot (1983) は述べている。(21) の仮定、(22) の譲歩の例についても、Jeunot (1983) は同様の説明をしている。

藤田 (1985) はこれについてさらなる考察をしており、(20) の例において (il, médecin) という関係は予め構築されており (préconstruit)、「il と un の制約が解けるのはそうした préconstruit がある場合だけであり、それが C'est un N … との違いの一つではないか」(*ibid.*, p. 85) と指摘している。すなわち、« il est un bon médecin » という記述が可能であるためには、« il est médecin » という前提が必要であるということである。

3．実例分析

以下では、データベース Factiva を使って収集した IL EST UN N 型の実例をもとに分析を行う。収集例は、主語が三人称単数の人称代名詞 il と elle のものとし、être の時制は直説法現在、半過去、複合過去、単純過去、単純未来に限った。こうして収集した131例のうち、主語代名詞が人を表している例が101例、人以外を表している例が30例であった。主語が人である101例のうち、属詞の UN N が修飾語句を伴っているものは90例、修飾語句を伴っていないものは11例であった。主語が人以外である30例のうち、属詞の UN N が修飾語句を伴っているものは28例、修飾語句を伴っていないものは 2 例であった。本稿では煩雑さを避けるため主語が人を表している例に限って分析を行うこととする。

3.1.　属詞が修飾語句を伴う場合

以下では主語が人であり属詞が修飾語句を伴っている例について観察する。修飾語句の多くは形容詞または de＋名詞句であったため、この二種類のタイプについて見ることにする[8)]。

3.1.1.　修飾語句が形容詞の場合

収集例90例のうち、修飾語句が形容詞であるものは47例見られた。その多くが評価を表す質的形容詞である。

(24) « Tom [Cruise] a vraiment du talent. J’ai été surpris par la vitesse à laquelle il a tout assimilé ce que je lui ai expliqué. *Il est un bon pilote* », a expliqué Coulthard sur le site Web de l’équipe Red Bull. (*Le Journal de Québec*, 27/8/2011, Factiva)

(25) Son [= de Julius Malema] principal soutien est Winnie Madikizela-Mandela, l’ex-femme de Nelson Mandela qui s’était fait une spécialité des mêmes accents populistes. Voyant en lui le prochain président du pays, elle a encore dit vendredi qu’ “un jour *il sera un grand leader*”. (*Agence France Presse*, 29/8/2011, Factiva)

(26) Omar Khayyam, dont le nom signifie « vendeur de tentes », du métier de son père, est né en 1048 à Nichapour (actuellement en Iran). *Il était un*

homme brillant, qui excellait en philosophie, en poésie, en mathématiques ou en astronomie. (*Horizons*, 26/8/2011, Factiva)

(24) から (26) の例において、イタリックで示したコピュラ文が形容詞を伴っていなかったらほとんど意味をなさないことは言うまでもない。(24) においては、Tom Cruise がカーレーサーだと言いたいわけではなく、レーシングカーを操縦する腕前が素晴らしいと言いたいのである。(25) においては、Julius Malema が単にリーダーになるということではなく、偉大なリーダーになることが重要なのである。また、(26) においては、brillant という形容詞がなく、Il était un homme だけであったならば、情報量はゼロに等しい。ここでの homme は、情報として重要である brillant という形容詞およびそれに続く関係詞節の支えとして機能しているのである。二名のインフォーマントに確認したところ、(24) から (26) の例におけるコピュラ文の主語 IL は全て CE に置き換えても問題ないとのことである。

では、なぜこれらの例におけるコピュラ文の主語は CE でなく IL が用いられているのであろうか。これについては、まず次の例において考えてみることにする。

(27) Et Marie-Josée Croze, qui n'hésite pas à dire qu'*elle est « une actrice très privilégiée »* honore ce métier. (*Le Journal de Québec*, 27/8/2011, Factiva)

(28) M. Sarkozy avait siphonné les voix des pieds-noirs en 2007 en faisant croire qu'*il était un Jean-Marie "Le Pen décomplexé"*, assure M. Aliot, implanté politiquement dans le département. (*Agence France Presse*, 26/8/2011, Factiva)

(29) Hier, Aurélien Evangelisti a montré qu'*il était un grand champion*. (*Midi Libre*, 23/8/2011, Factiva)

(27) から (29) の例においては、コピュラ文は全て que で導かれた従属節の中に現れており、コピュラ文の主語人称代名詞はそれが従属している節の動作主と同じ人物に照応していることが分かる。これらの例における主語人称代名詞 IL を指示代名詞 CE に変えたらどうなるであろうか。

(27′) Et Marie-Josée Croze, qui n'hésite pas à dire que *c'est « une actrice très*

privilégiée » honore ce métier.

(28′) M. Sarkozy avait siphonné les voix des pieds-noirs en 2007 en faisant croire que *c'était un Jean-Marie "Le Pen décomplexé"*, assure M. Aliot, implanté politiquement dans le département.

(29′) Hier, Aurélien Evangelisti a montré que *c'était un grand champion*.

二名のインフォーマントによると、(27′), (28′) における CE はそれぞれ (27), (28) における IL とは異なり、主節に現れている人物とは別の人物を表している解釈になるという。また、(29′) の CE については、一名のインフォーマントは主節の主語と同一人物であるかは曖昧であると判断し、もう一名は主節の主語とは違う人物を指すと判断している。この場合、指示代名詞 CE は、人称代名詞 IL とは異なる次元での指示を展開し、主節に現れている人物との同一照応は保証されないことになるであろう。仮に CE が主節の人物と同一の人物を表したとしても、文全体の解釈は IL の場合とは決して同一にはならないはずである。例えば、次の二つを比べてみよう。

(30) a. Paul parle souvent de Marie. Il croit qu'elle est une actrice douée.
b. Paul parle souvent de Marie. Il croit que c'est une actrice douée.

(30a) においては、従属節のコピュラ文の主語 elle は先行する文の中の Marie に照応しており、Paul の信念の世界において、彼女が才能のある女優であるということを表している。すなわち、この場合、「Marie が才能のある女優である」という命題内容は Paul の主観によるものである。一方、(30b) においては、たとえ従属節の主語 ce が Marie を表したとしても、それは、先行する文に現れている Marie という言語資源に対して照応を行っているわけではなく、言語外に存在する Marie という人物に対して語用論的に結びついているに過ぎない。この場合、「Marie が才能のある女優である」という命題内容は Paul の信念の世界からは独立しており、客観的な事実として判断されているか、少なくともこの文の発話者が客観的な事実として判断しているということになる。

ここで、(24) から (26) の例に戻って考えてみよう。(24) では Tom Cruise が話題となっているが、映画の話ではなく、カーレースの話が展開されている。Tom Cruise と言えば、映画スターとして有名な人物であり、世間一

般にはそういうものとして同定されている。それは (24) の例における発話者にとっても同じことであり、Tom Cruise を同定済みの人物として人称代名詞 IL で表し、この人物について「腕のいいカーレーサーである」という属性を記述しているのである。もし、指示代名詞 CE を用いて C'est un bon pilote. と述べたならば、Tom Cruise について再定義を行ったことになり、Tom Cruise が「腕のいいカーレーサー」として客観的に同定できることを含意することになる。しかしながら、もし Qui est Tom Cruise ? と尋ねられれば、当然のことながら、C'est un bon pilote. とは答えず、C'est un acteur américain. のように答えるであろう。(24) の例において主語が IL であるのは、ほとんどの聞き手にとって Tom Cruise が第一にアメリカの俳優として定義付けられることを前提としてうえで、新たな属性を発話者の主観的評価として述べているに過ぎないからであろう。(25), (26) に見られるコピュラ文も同様であり、主語に IL が用いられているのは、話題となっている人物について、その人物の客観的な定義とは別に、主観的な評価を行っているからであると考えられる。

では、なぜ属詞位置に不定冠詞が現れるのであろうか。その理由としては、形容詞等の修飾語句の支えとして、名詞が完全な名詞として機能するために、通常の統辞的規則に従って冠詞を伴っているということが挙げられるであろう。しかしながら、ここで現れている不定冠詞は、集合からの一個体の抽出を念頭において用いられているものではないと考えられる。すなわち、ここで取り上げた属詞位置の UN N は、LES N という集合の存在を前提とせず、したがって集合から抽出され量化されたものではないと考えられるのである。Un bon médecin が médecin の一タイプとして内包的なレベルで下位クラスを構築していることを藤田（1985）が指摘しているように、属詞位置の UN N は内包と大きく関わっていると考えられる。

3.1.2.　修飾語句が de＋名詞句の場合

修飾語句が de＋名詞句であるものは22例見られた。この中には以下の例のように、de＋無冠詞名詞句の形で質的形容詞と同じ働きをするものもいくつか存在する。

(31)　Parmi, les musiciens qui participent, il y a Dejan Bogdanovich, au violon. *Il est un soliste de notoriété internationale*, lauréat de plusieurs concours et

professeur de violon au conservatoire de Venise. [= (6)]

(32) Quand BOUDEBOUZ (7), double buteur (6e et 42e) mais encore trop inconstant, se débarrassera de ses scories, *il sera un joueur de tout premier plan*. (*L'Équipe*, 29/8/2011, Factiva)

これらの例に関しては、質的形容詞を伴う場合と同様の分析が可能であろう。

しかしながら、de＋名詞句における名詞句の多くは、限定詞を伴っているか、固有名詞の形で現れ、確固たる指示対象を持っている。

(33) Intéressé par l'art vidéo, Teboho Edkins étudiera aussi en Studio national des arts contemporains de Fresnoy en France et au Deutsch film und fernesehakademie de Berlin (Allemagne). [alinéa] Il a été invité au festival de Douarnenez parce que les organisateurs considèrent qu'*il est un représentant de la nouvelle génération des réalisateurs sud-africains*. (*Ouest France*, 27/8/2011, Factiva)

(34) Ce « triomphe de la justice » a conduit pourtant Kenneth Thompson, l'avocat de la plaignante à s'étrangler d'indignation. « Que ce serait-il passé si l'accusé venait du sud du Bronx ? Ou s'*il était un plombier de Brooklyn* ? Vous pensez que le procureur aurait agi de la même manière ? Qu'il aurait écarté ainsi des preuves irréfutables ? », interrogeait-il. (*Le Temps*, 24/8/2011, Factiva)

(33), (34) のような例においては、de＋名詞句によって UN N の範囲が限定されており、質的形容詞を伴う UN N とは異なる分析が可能であると考えられる。すなわち、これらの例における UN N de SN は、LES N de SN という集合の存在を前提とし、そこから一個体が抽出されていると解釈できるのである。次の例はどうであろうか。

(35) Angel Cabrera (41 ans) est sans doute le meilleur golfeur sud-américain de l'histoire. L'Argentin a glané deux trophées du Grand Chelem au cours des quatre dernières saisons, l'US Open en 2007 et l'US Masters en 2009. *Il est un habitué de l'US PGA Tour*, et ses apparitions en Europe sont rares.

(*Sportinformation*, 23/8/2011, Factiva)

(36) Pour Pascaline Brébion, c'est l'accueil qui lui a été réservé à l'atelier « Ocre-Rose » de Toussugière, par Gérard et son épouse Marie-Jo, qui l'ont incitée à revenir pour la seconde fois. *Elle est une admiratrice de Séraphine de Senlis, de ses motifs décoratifs répétés, de ses toiles gorgées de lumière et de couleurs*. (*La Montagne*, 25/8/2011, Factiva)

(35) の habitué（常連）、(36) の admiratrice（ファン）のような語は、それのみでは表現として不完全であり、修飾語句を伴って「何の常連であるか」、「何のファンであるか」を明確にする必要がある。これらの表現においては、属詞位置の核となる名詞は、主語と de 以下の名詞句との関係を示しているに過ぎず、必ずしも集合からの抽出とは感じられない。属詞名詞が不定冠詞を必要とするのは、de＋名詞句の支えとなるため、完全な名詞として機能しなければならないからであろう。

3.2. 属詞が修飾語句を伴わない場合

主語が人であり属詞が修飾語句を伴っていない例は全部で11例見られた。

まず、次の例においては、架空の存在を表す名詞が属詞位置に現れている。

(37) Fiona Gordon, Dominique Abel et Bruno Romy nous parlent de leur dernier film, « La Fée », présenté en avant-première hier à l'Atalante. Dom (Dominique Abel) est veilleur de nuit dans un petit hôtel. Une nuit, une femme (Fiona Gordon) se présente à lui, sans valise et pieds nus, en lui affirmant qu'*elle est une fée* et qu'il a droit à trois vœux. (*Sud Ouest*, 25/8/2011, Factiva)

(38) Secret Circle NOUVELLE SÉRIE (HD, pré-diffusion de CW) Avec : Brittany Robertson, Thomas Dekker, Gale Harold Basée sur la populaire collection de nouvelles écrites par L.J. Smith, suivez les aventures d'une jeune femme fraîchement arrivée dans une petite ville. Non seulement elle y découvrira qu'*elle est une sorcière* et membre d'un clan secret mais elle découvre aussi qu'elle est la clé d'une bataille ancienne [sic] entre le bien

et le mal. (*Canada Newswire*, 26/8/2011, Factiva)

(37) においては fée（妖精）、(38) においては sorcière（魔女）という語がそれぞれコピュラ文の属詞として現れている[9)]。どちらの例においても、不定名詞句は隠喩的に用いられているわけではなく、名詞が表すクラスの一メンバーであることが示されている。したがって、これらの例における UN N は LES N からの抽出であると言える。主語として CE ではなく IL が用いられているのは、これらのコピュラ文が絶対的な真理として提示されているわけではなく、ドラマや映画といったフィクションの世界という限られた条件下においてのみ真であるからであろう[10)]。

次の例においては、属詞の UN N として現れている名詞が職業を表している。

(39) Dans un univers toujours en bascule entre cirque, music-hall et théâtre, Buno régale son public de facéties visuelles bien farfelues et des histoires hasardeuses d'un fou cherchant à amuser la galerie en jouant le magicien, le musicien, le pitre … Buno ne fait pas le clown, *il est un clown*. Un clown né de l'imagination de Bruno Robert, autodidacte élevé à l'école de la rue qui a créé en 1997, la compagnie Aruspice Circus. Parce qu'être clown est un plaisir qui lui permet d'échapper au monde et de ne pas oublier ses rêves d'enfants, Bruno est devenu Buno. (*La Voix du Nord*, 24/8/2011, Factiva)

(40) Pourquoi Projecteur braque-t-il son spot sur Kadhafi ? Parce qu'*il est un écrivain* (Eh oui !), il a publié en 1998 un recueil de nouvelles au titre très prémonitoire, Escapade en enfer. Par ailleurs, le colonel est un sujet de roman ou de film, tant il a la démesure, l'outrance et le destin des personnages de fiction. [= (8)]

(39) のコピュラ文は、Buno という人物がピエロであることを表す意図で用いられているわけではない。この人物がピエロであることはそれまでの文脈で聞き手には既に分かっているからである。このコピュラ文は、いわば vrai（真の）という語が隠れており、Buno という人物が「真の」ピエロであることを表しているのである。したがって、ここでは un clown という名詞句が「真のピエロ」を含意しており、clown の内包が前面に出て

いることが分かる。(40) においても、同様の分析が可能であろう。では、次の例ではどうであろうか。

(41) Moi, ce que je déplore dans l'affaire de la Libye, c'est le fait que l'Europe intervienne. Franchement, je ne suis pas du tout d'accord avec ce qu'ils sont en train de faire à Kadhafi, même s'*il est un dictateur*. (*All Africa*, 25/8/2011, Factiva)

(42) Mais ne dites surtout pas à [Alain] Traoré qu'*il est un buteur*. Lui, il est là « pour faire jouer les autres ». (*L'Équipe*, 28/8/2011, Factiva)

(41) のコピュラ文においては、必ずしもカダフィ大佐が「真の」独裁者であることを言い表そうという意図があるとは言い難い。しかしながら、独裁者というクラスの一メンバーであるという解釈も適当ではないように思われる。ここで問題となっているのは、カダフィ大佐という人物が「独裁者」と呼ばれるにふさわしい性質を持っているか否かということであろう。したがって、ここでの不定名詞句 UN N は、必ずしも量化を問題にしているわけではなく、むしろ名詞が持つ性質、言い換えれば内包が関わっていると言える。これは、(42) のコピュラ文においても同様であろう。

4．不定名詞句 UN N と内包

ここで、内包と結びついた UN N について考察していくことにする。そのためには、否定文における DE N との比較が示唆的である。初等文法で学ぶように、否定文中の直接目的補語の位置に現れる名詞句に付く不定冠詞および部分冠詞は通常 DE という形で現れる。しかしながら、否定文の直接目的補語の位置であっても、不定冠詞や部分冠詞が DE にならない場合があることも多くの文法書等で指摘されている。

(43) Il n'y a pas de poissons dans cet étang. (福島, 2010, p. 34)

(44) Il n'y a pas des maladies, mais des malades. (*ibid.*)

福島（2010）は、(43) と (44) においては「否定のスコープ」が違うということを指摘している。すなわち、(43) では「魚」というものの「存在」に

及んでいるのに対し、(44) では「病気」というもののいわば「名札」に及んでいるということである。拙論 (2011) においては、これを敷衍して「量」の否定と「質」の否定として区別した。

(45) Il n'y a pas de chef. (長沼, 2011, p. 134)
(46) Il n'y a pas un chef. (*ibid.*)

(45) は「指導者がいない」という存在を否定する解釈であり、(46) は un が数詞でない限りにおいては、「指導者の名にふさわしいものがいない」という解釈となる。(45) も (46) も否定は名詞に及んでいると解釈できるが、(45) では chef が表す対象の存在に否定が及んでいるのに対し、(46) では chef という名称が否定されている。名称が否定されているということは、すなわち、その名称を与える適正が否定されているということである。言い換えれば、(45) では否定のスコープが chef の「量」に及んでいるのに対し、(46) では chef の「質」に及んでいるのである。したがって、外延が否定された場合には DE N として具現化し、内包が否定された場合には UN N として具現化すると言える。(45) も (46) も肯定文に書き換えればどちらも

(47) Il y a un chef. (*Ibid.*)

となるわけであり、この場合の un chef は量的にも質的にも解釈できるということになる。

不定冠詞 UN は言うまでもなく「 1 」を表す数詞 UN から派生したものであるが、形の上では不定冠詞単数と数詞「 1 」は区別ができない。しかしながら、数詞は否定文の直接目的補語の位置において、影響を受けることはない。

(48) Il *n*'y a *pas un* nuage au ciel. (GIONO, *Regain*, p. 50, cité par 朝倉, 2002, p. 371)

(48) のように、「一つの〜もない」と言いたい場合は、pas UN N の形で表わされる。しかしながら、不定冠詞 UN については事情が変わってくる。

不定冠詞 UN は、もはや「1」という具体的な数を表しているというわけではなく、外延レベルにおける個体の存在を示しているに過ぎない。この存在が否定された場合、不定冠詞 UN は生起できなくなり、pas DE N の形で具現化される。一方、たとえ否定文であっても、存在が否定されていなければ、不定冠詞 UN は生起が可能となり、pas UN N の形で具現化される。この場合、形の上では数詞「1」の場合となんら区別がつかないが、そのメカニズムは全く異なっている。すなわち、pas UN N において、UN が数詞の場合は UN が否定の対象となるが、UN が不定冠詞の場合は、否定はいわば UN を素通りして、N の内包を対象としているのである。このように、「1」という数を積極的に表していた UN は、不定冠詞となって外延レベルでの個体の存在を示すマーカーとして機能し、不定名詞句 UN N は、文脈に応じて、不定冠詞 UN が示す外延レベルに重きが置かれたり、名詞 N が示す内包レベルに重きが置かれたりするものと考えられる。

質的形容詞を伴っている不定名詞句については名詞の内包に重きが置かれているという観察がなされうる。

(49) « Tom [Cruise] a vraiment du talent. J'ai été surpris par la vitesse à laquelle il a tout assimilé ce que je lui ai expliqué. *Il est un bon pilote* », a expliqué Coulthard sur le site Web de l'équipe Red Bull. [= (24)]

(50) Hier, Aurélien Evangelisti a montré qu'*il était un grand champion*. [= (29)]

(49), (50) はどちらも評価に関わる形容詞を伴っている。しかしながら、(49) は bon という形容詞において Tom Cruise が善人であることを表そうとしているわけでもなければ、(50) は grand という形容詞によって Aurélien Evangelisti が偉人であることを表そうとしているわけでもない。(49) の bon は pilote の内包を修飾しているのであり、「カーレーサーとして素晴らしい」ということを言い表しているのである。同様に (50) の grand は champion の内包を修飾しているので、「チャンピオンとして偉大である」ということを言い表しているのである。次の例においても同様であろう。

(51) M. Sarkozy avait siphonné les voix des pieds-noirs en 2007 en faisant croire qu'*il était un Jean-Marie "Le Pen décomplexé"*, assure M. Aliot, implanté politiquement dans le département. [= (28)]

(51) においては、Jean-Marie Le Pen という固有名詞が隠喩的に用いられている。しかしながら、Sarkozy 氏を単純に Jean-Marie Le Pen のような人物として記述しているわけではなく、décomplexé（コンプレックスが解消した）という形容詞によって、Jean-Marie Le Pen の特性を調整しているのである。ここでの形容詞も名詞の内包に対する修飾であり、不定名詞句全体において内包に重きが置かれていると言える。

また、属詞位置の UN N が LES N からの抽出であると解釈できる例においても、重きが置かれているのは N の内包であると考えられる。すなわち、elle est une fée や elle est une sorcière のような文が言わんとしていることは、主語となっている人物がそれぞれ fée（妖精）、sorcière（魔女）という名称にふさわしい内包を備えているということである。そもそもコピュラ文においては、主語の指示対象の存在前提があるため、属詞名詞句によってあえてその存在を示す必然性はないと言える。

5．おわりに

本稿では、主語が IL でありながら属詞に UN N を持つコピュラ文について考察を行った。実例の分析からこのようなコピュラ文の多くは属詞名詞が修飾語句を伴っていることが分かった。修飾語句として見られたのは主に形容詞または de＋名詞句であった。形容詞はほとんどが質を表すものであり、主観的評価に関わっていた。この場合、UN N＋Adj. は集合の存在を前提としておらず、内包に関わる記述であった。一方、de＋名詞句における名詞句の多くは限定詞付きの名詞か固有名詞であり、これには二つのタイプが観察された。一つは de＋名詞句が UN N の範囲を限定しているタイプであり、この場合は集合が前提にあり、UN N＋de＋SN はそこからの抽出であると考えられる。もう一つは UN N が主語と de＋名詞句との関係を示しているタイプであり、この場合は必ずしも集合からの抽出は含意されていないと考えられる。また、属詞名詞が修飾語を伴わない例に関しては、集合からの抽出であるものと、集合を前提とせずに内包が表に現れているものの両方が見られた。内包が表に現れている例については、いわば vrai が省略されており内包が積極的に前面に出ていると解釈できるものと、必ずしも積極的に前面に出ているわけではないと解釈できるものとが見られた。

不定冠詞 UN は元々は数詞 UN であり、本来は「１」という明確な数を表していた。しかしながら、これが不定冠詞として文法化が進んだ結果、厳密に「１」という数を表す意図が薄れ、外延に存在する個体を示す機能に移行していったと考えられる。不定名詞句 UN N の中には内包が前面に現れていると解釈できる例も見られるが、この場合、不定冠詞 UN が積極的に N の内包を引き出しているというわけではなく、不定冠詞 UN がある個体の外延における存在を示す機能にとどまった結果、相対的に N の内包が表面に現れてきたものと考えられる。

注

1）属詞として現れる無冠詞名詞句については、拙論（2002, 2003, 2005）参照。

2）« Lorsque l'attribut (du sujet ou du complément d'objet : *On l'a élu député — On l'a nommé général. — Elle a pris un vieillard pour amant*) désigne une profession, un rôle ou un statut social, une nationalité, l'absence de déterminant est de règle si cette attribution n'a pour rôle que d'opérer un classement (VII : 1.5.2.3) ; dès que s'y ajoute une caractérisation ou une détermination supplémentaire, le déterminant réapparaît : *Jean est médecin / un bon médecin / le médecin de Pierre — Je suis soldat* (simple détermination d'un statut) / *Je suis un soldat* (« digne de ce nom ») — *Gérard est français jusqu'au bout des ongles / est un excellent Français.* » (Riegel, Pellat & Rioul, 1994, p. 165)

3）Bon, excellent のような主観的評価を表す形容詞を伴った名詞句は属詞位置に無冠詞で現れることもある。これについては、拙論（2010）参照。

4）« Si le locuteur veut insister sur le fait que Paul a la nationalité française, alors (50a) est la phrase attendue. Mais Paul pourrait avoir émigré aux États-Unis, et exhiber ce que l'on imagine être des traits prototypiques du Français, tels que béret basque, baguette de pain, fromages et vins de France, alors (50b) est la phrase naturellement attendue. » (Picabia, 2000, p. 83)

5）« La répartition suit un critère lexical net : *démon, monstre, ange, génie* nomment la nature de certains êtres ; la plupart sont même à l'origine des espèces. Au contraire, *devin, envoûteur, magicien, prestidigitateur* sont des fonctions, et les suffixes *-cien, -eur, -ogue, -iste*, soulignent que ces substantifs sont liés à des activités. Un survol vérifie que les noms de métiers et professions, qui sont des activités, ne demandent effectivement pas le déterminant (*il est plombier*), mais que ceux des espèces animales ne peuvent s'en passer (*c'est un chat*) ; en l'absence de déterminant, l'auditeur conclut au détournement de sens (*il est* {*rat, chien, vache,*

chameau}) » (CURAT, 1999, p. 229)

6）COPPIETERS (1975), BURSTON & MONVILLE-BURSTON (1981), POLLOCK (1983), TAMBA-MECZ (1983), BOONE (1987, 1991, 1998), 東郷 (1988, 1993), 三藤 (1989), 坂原（1990），小田（1999）など。

7）このような不定冠詞 UN の用法については、藤田（1985）が挙げているドルヌ他（1984）の他、KLEIBER (2003) も参照のこと。

8）収集例の中には属詞名詞が形容詞と de＋名詞句の両方を伴っているものも多く見られたが、煩雑さを避けるためこのような例はそれぞれの合計数から除外し、考察の対象から外した。

9）CURAT (1999) は、fée については無冠詞で属詞になれないと指摘しているが、sorcière (< sorcier) については無冠詞で属詞になれるものに分類している。KUPFERMAN (1991) は、sorcière について次のような指摘をしている。

(I) a. Ma femme est une sorcière.

b. Ma femme est sorcière. (KUPFERMAN, 1991, p. 62)

KUPFERMAN (1991) によると、(Ia) には二通りの解釈がある。一つは文字どおり、「私の妻は『魔女』という種の一個体である。」という解釈であり、もう一つは隠喩的な意味で、「私の妻は『魔女』という種の個体と同じ特性を持っている。」という解釈であり、この場合、ma femme est infernale［地獄のような］／insupportable［耐えられない］／diabolique［悪魔のような］… などの形容詞を使った言い換えが可能である。(Ib) のような無冠詞名詞を用いた文の解釈は、(Ia) の前者の解釈、すなわち、妻が魔女という個体であるという解釈と同じになる、とのことである。

10）JEUNOT (1983) は、

(II) Dans ce film, il est un bon médecin. (JEUNOT, 1983, p. 93)

について、« Dans ce film, il joue le rôle d'un bon médecin. » というパラフレーズが可能であるとし、(II) が示す関係が有効であるのは特定の状況的定位（ancrage situationnel）についてのみであることを指摘している。

参考文献

BOONE, A. (1987) : « Les constructions « il est linguiste » / « c'est un linguiste » », *Langue française*, 75, pp. 94–106.

BOONE, A. (1991) : « Remarques sur les phrases copulatives », *Actes du XVIIIe Congrès international de Linguistique et Philologie romanes*, Max Niemeyer, Tübingen, pp. 127–141.

BOONE, A. (1998) : « Essai de typologie des phrases copulatives », *Prédication, assertion, information (Actes du colloque d'Uppsala en linguistique française, 6-9*

juin 1996), Uppsala, pp. 67−80.

BURSTON, J. L. & M. MONVILLE-BURSTON (1981) : « The use of demonstrative and personal pronouns as anaphoric subjects of the verb *ÊTRE* », *Lingvisticæ Investigationes*, V : 2, pp. 231−257.

COPPIETERS, R. (1975) : « The opposition between IL and CE and the place of the adjectives in French », *Harvard Studies in Syntax and Semantics*, 1, pp. 221−280.

CURAT, H. (1999) : *Les déterminants dans la référence nominale et les conditions de leur absence*, Droz S.A., Genève.

JEUNOT, D. (1983) : «« Il est médecin » (pourquoi pas ?) », *Linguistique, énonciation : Aspects et détermination*, Édition de l'EHESS, Paris, pp. 81−95.

KLEIBER, G. (2003) : « Indéfini, partitif et adjectif : du nouveau. La lecture individualisante », *Langages*, 151, pp. 9−28.

KUPFERMAN, L. (1991) : « Structure événementielle de l'alternance UN / Ø devant les noms humains attributs », *Langages*, 102, pp. 52−75.

NAGANUMA, K. (2005) : « Les syntagmes nominaux sans déterminant en position attributive dans une phrase copulative : à propos de la fonction de description de rôle », *Studies In Foreign Language Education*, 27, Foreign Language Center, University of Tsukuba, pp. 107−116.

PICABIA, L. (2000) : « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française*, 125, pp. 71−89.

POLLOCK, J.-Y. (1983) : « Sur quelques propriétés des phrases copulatives en français », *Langue française*, 58, pp. 89−125.

RIEGEL, M., J.-C. PELLAT & R. RIOUL (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France, Paris.

TAMBA-MECZ, I. (1983) : « Pourquoi dit-on : "ton neveu, IL est orgueilleux" et "ton neveu, C'est un orgueilleux" ? », *L'information grammaticale*, 19, pp. 3−10.

朝倉季雄（2002）：『新フランス文法事典』，白水社.

小田涼（1999）：「代名詞 CE と IL の指示対象のとらえ方について」，『フランス語学研究』，33，日本フランス語学会，pp. 52−57.

坂原茂（1990）：「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」，『フランス語学研究』，24，日本フランス語学会，pp. 1−13.

東郷雄二（1988）：「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui. ―代名詞 IL と CE の用法について」，『フランス語フランス文学研究』，53，日本フランス語フランス文学会，pp. 102−111.

東郷雄二（1993）：「指示と照応―照応代名詞 IL と CE の用法を中心に―」，『フランス語とはどういう言語か』，駿河台出版社，pp. 75−94.

ドルヌ，フランス他（1984）：「TEL について（I）」，『フランス語学研究』，18,

日本フランス語学会，pp. 37–56.
長沼圭一（2002）:「コピュラ文の属詞として現れる無冠詞名詞句」,『筑波大学フランス語・フランス文学論集』, 17, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会，pp. 153–187.
長沼圭一（2003）:「役割記述機能を持つ無冠詞名詞句について— quand on est femme, on ne dit pas ces choses-là —」,『フランス語フランス文学研究』, 83, 日本フランス語フランス文学会，pp. 90–100.
長沼圭一（2010）:「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」,『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』, 42, pp. 113–135.
長沼圭一（2011）:「フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句 UN N について」,『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』, 43, pp. 117–140.
福島祥行（2010）:「浪花ふらんす亭弥縫録11」,『ふらんす』, 2010年 2 月号, pp. 32–35.
藤田知子（1985）:「フランス語の属詞構文について」,『フランス語学研究』, 19, 日本フランス語学会，pp. 80–88.
三藤博（1989）:「フランス語における c’est / il est, ce N / le N の対比について」,『フランス語学研究』, 23, 日本フランス語学会，pp. 60–66.

Le syntagme nominal UN N apparaissant en tant qu'attribut en français

Keiichi NAGANUMA

En français, la structure *Il est un N*, comme dans « Il est un médecin. », est souvent jugée inadéquate ; il faudrait utiliser le pronom démonstratif *ce* : « C'est un médecin. ». Elle est cependant possible selon les contextes et parfois observée dans le corpus français.

Quand cette phrase copulative est possible, elle est le plus souvent accompagnée d'un terme modificatif comme un adjectif ou le syntagme prépositionnel *de SN*. Dans la structure *Il est un N Adj.*, la plupart des adjectifs sont qualificatifs et représentent une évaluation subjective. Le syntagme nominal *un N Adj.* n'est pas considéré comme extrait de l'ensemble *les N Adj.*. En ce qui concerne la structure *Il est un N de SN*, deux types sont observés. Le premier est celui où *de SN* circonscrit l'étendue de *un N* et dans ce cas-là, le syntagme nominal *un N de SN* présuppose l'ensemble *les N de SN*. Le second est celui où *un N* représente la relation entre le sujet et *de SN*, et alors il n'y a pas forcément l'extraction de l'ensemble *les N de SN*. Il existe aussi des exemples *Il est un N* dont le syntagme nominal *un N* n'est accompagné d'aucun modificateur. Pour cette phrase copulative, deux types sont à distinguer : celui où le syntagme nominal *un N* présuppose l'ensemble *les N* et celui où il ne le présuppose pas.

Lorsque le syntagme nominal *un N*, modifié ou non, ne présuppose pas l'extraction de l'ensemble *les N*, il est observé que l'intension de *N* est mise en avant. Dans ce cas-là, l'article indéfini *un* n'a plus pour but de transmettre le nombre exact *un* ; il est fort grammaticalisé pour se contenter de représenter la seule existence en extension d'un individu signifié par *N*. Nous pouvons inférer de cette grammaticalisation de l'article indéfini que l'intension de *N* est relativement mise en relief.